

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370267

研究課題名(和文) 18世紀前半イギリスにおけるオラトリオ形成への笑劇とバーレスクの影響

研究課題名(英文) Influences of the Farce and the Burlesque on the Development of the Oratorio in the First-Half 18th Century Britain

研究代表者

高際 澄雄 (TAKAGIWA, SUMIO)

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：50092705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：ヘンデルのオラトリオ作品は、かつて彼のイタリア歌劇が非合理的な作品と考えられていたように、単調な中産階級的作品だと考えられることが一般的だが、個々の作品を分析すれば判明するように、豊かで多様性に富んでいる。これはオラトリオ成立がフィールディングの笑劇とバーレスクに関連していたことから明らかである。

ヘンデルのオラトリオ期は『メサイア』の成功から始まるが、その後の展開は容易ではなかった。その一例が『セメレー』と『ヨセフとその兄弟たち』である。これらの作品は小説興隆期のパメラ論争に結びつけると、その価値が明らかとなる。ヘンデルは最後まで個性溢れる傑作オラトリオ作品を書き続けたのであった。

研究成果の概要(英文)：Handel's oratorios are commonly thought to be monotonous middle-class works, as his Italian operas used to be thought ridiculous, but if individual works are closely analysed, they will be found to be rich and diverse. It is because Handel's oratorio composition was closely connected with Fielding's playwriting of farces and burlesques.

Handel started his oratorio-only performance with the success of Messiah, but it did not go smoothly as Semele and Joseph and His Brethren show. The charms of those works will be found if they are listened to in the context of Pamela controversy. Handel continued to compose fine oratorios until his death.

研究分野：英文学・イギリス文化論

キーワード：ヘンデル オラトリオ 18世紀前半イギリス セメレー ヨセフとその兄弟たち パメラ論争 フィールディング ジョウゼフ・アンドルーズ

### 1. 研究開始当初の背景

ヘンデルのオラトリオは『メサイア』が圧倒的に有名であるため、他作品は作品独自の特徴が十分理解されて鑑賞されておらず、類推による評価が多い。

かつてヘンデルのイタリア歌劇が当時のイギリス文人の偏見から不合理で馬鹿げた作品と判断され、20世紀後半になって再評価されたように、オラトリオ作品も改めて個々の作品を評価した上で、ヘンデルのオラトリオの再評価を行わなければならない。

ベートーヴェンの最上級の尊敬が示すように、ヘンデルはヨーロッパ音楽史上、最大の天才の一人であった。20数曲にも上るオラトリオ作品が『メサイア』1曲で判断できる類型的作品であるはずがない。

ヘンデルは独立不羈の精神によって、作曲公演を自ら行っていたため、作品成功に向けて様々な工夫を加えた。このようなヘンデルのオラトリオ作品の作曲意図を、これまで完全に理解して来なかった。

音楽史研究者はヘンデルの成果を音楽の世界のみで判断する傾向にある。確かに音楽技術においてもヘンデルは傑出しており、調性、和声法、歌唱技術、合唱技術の観点からも評価する必要性は十分にある。

しかしながら、ヘンデルにとってもっとも重要だったことは、上演芸術としてのイタリア歌劇およびオラトリオを成功させ、負担しなければならない歌手への出演料、楽器演奏者の出演料、舞台装置の制作費、演奏会場の借用料を支払い、一定程度に自らも儲けを得て生活を支えることができるように、多くの入場料を得ることであった。従って、音楽技術だけでなく、歌手の選択と台本内容の選択に配慮せねばならなかったのである。

このような観点から見たときに、とりわけ遅れているのがオラトリオの制作背景の分析である。ヘンデルのオラトリオを『メサイア』から引き離し、もっと大きな上演環境に置いて作品の特徴を明らかにする必要性を感じたことが研究を開始した理由である。

### 2. 研究の目的

ヘンデルはイタリア歌劇、オラトリオ、宗教曲、式典音楽、合奏曲、器楽独奏曲など、当時存在したほとんどの音楽ジャンルで作曲し、ことごとく傑作を残したが、20世紀後半にイタリア歌劇が再評価されたために、オラトリオがある意味で無視されてしまった。

本研究は、成功作である『メサイア』および『マカベアのユダ』から離れて、個々の作品の独自性を分析することである。

『メサイア』および『マカベアのユダ』が聖書の物語に基づく作品であるという理由から、オラトリオを宗教的主題による音楽劇と限定することはできない。オラトリオの実験期にも『快活な人、沈思の人、中庸の人』のように、宗教的主題から離れて、広く人間の感性を取り扱った作品が存在した。まして

オラトリオの作曲公演に集中して以降、その傾向は強まっている。

ヘンデルのイタリア歌劇とオラトリオに共通するのは、人間性に対する強い関心である。20世紀後半にイタリア歌劇の基本的特質が明らかにされ、個々の作品の魅力が一層深く理解されるようになったように、ヘンデルのオラトリオも、個々の作品の独自性を分析しながら、作品が類型性から離れた魅力ある作品であることを明らかにして、オラトリオ作曲公演に集中して以降も、豊かな人間性にこそヘンデルが強い関心を示したことを明らかにすることが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

ヘンデルは当時の聴衆の好みを推測し、作品が聴衆に好かれ演奏会が成功するように工夫を重ねた。このヘンデルの配慮が時に成功し、時に失敗した重要な要素であったが、本研究では今まであまり注目されなかった演劇界とヘンデルとを関係づけながら、ヘンデルのオラトリオ作品の特質分析を行った。

ヘンデルの主要作品群であるイタリア歌劇も、オラトリオも、上演芸術として演劇界と密接な関係にあった。1720年代にイタリア歌劇が成功した背景には、当時の演劇界の低迷があった。ところが1720年後半にゲイの『乞食オペラ』に典型的にみられる演劇界の活発化が生まれ、イタリア歌劇が逆に低迷した。

ヘンデルはこの変化を敏感に感じ取っており、『エステル』の再演以降、『デボラ』『アレクサンドロスの饗宴』『エジプトのイスラエル人』などのオラトリオ作品で実験を重ねていく。そして1742年に『メサイア』作曲公演でイタリア歌劇から完全に離れていくのである。

従ってヘンデルは社会の大きな変化を鋭く見抜いていた。オラトリオ期に入ってもその認識は変わらず、オラトリオ作品のテーマを宗教問題に限定することはなかった。

本研究では、演劇界で人気を博していた笑劇とバーレスクに着目した。これらのジャンルは以前から存在していたが、1730年代にフィールディングが劇作に応用し、人気を博してから当時の演劇界に急速に広まった。オラトリオを『メサイア』や『マカベアのユダ』の類型と見れば、なぜヘンデルが『セメレー』や『ヨセフとその兄弟たち』を作曲公演したのか理解できなくなる。しかしフィールディングの笑劇やバーレスクの人気およびその影響を考えれば、この2作品の特質が明らかになるのである。本研究は、イギリス文学史で近年大きな成果を収めつつあるフィールディング研究の手法を取り入れて、研究を行った。

### 4. 研究成果

フィールディングはこれまで小説家と考えられ、20歳代に書かれた劇作品は、後の小

説の習作と見なされてきた。しかし近年その劇作品の価値が見直され、当時の演劇界に与えた影響の大きさが判明した。

このフィールディングに着目するなら、今までヘンデルへの対抗意識のみで解釈されてきた貴族歌劇団の設立の目的も違ったものと理解できる。つまり演劇界が観客層を拡大したように、イタリア歌劇界もヘンデル以外の作曲公演者を増やすことによって観客を増やそうとしたのである。

しかしイタリア語による上演は少数の知識層にしか受け入れられず、イタリア歌劇の観客は増えなかったために、豪華な歌手を起用し、著名な脚本作家によって上演をおこなった貴族歌劇団は、十分な経済的収入が得られず瓦解した。

新機軸を打ち出しながらも、経済的な配慮をおこなって演奏会を開催していたヘンデルは辛うじて生き残ることができたが、イタリア歌劇から離れていく観客に対して新たな対策を迫られ、英語による演技のない音楽劇としてのオラトリオで新たな道を切り開こうとする。こうして1730年代には、『エステル』や『デボラ』などをイタリア歌劇作曲公演と平行しながら上演し、1742年にダブリンにおいて『メサイア』演奏会で成功を収めた結果、イタリア歌劇から完全に離れてオラトリオの作曲公演に集中したのである。

しかしヘンデルはオラトリオの内容を宗教的テーマに限定しなかった。その代表が『セメレー』と『ヨセフとその兄弟たち』である。

『セメレー』については、ウィントン・ディーンがきわめて人間性豊かな作品であると評価したことによって、近年その価値が理解されるようになったが、その対となる作品『ヨセフとその兄弟たち』をディーンは脚本作者の文学的才能がなかったがゆえの失敗作であると断言してしまった。しかし上演記録を見れば明らかになるように『ヨセフとその兄弟たち』は発表当時一定の人気を博し、何度か上演されているのである。ディーンが『ヨセフとその兄弟たち』を失敗作であると断じたことには問題がある。この2作品はもっと別の文化的背景を考慮しなければならない。

1740年代には身分違いの結婚をテーマとした小説『パメラ』が流行したことから、『パメラ』支持派と『パメラ』批判派で「パメラ論争」が繰り広げられていた。フィールディングは『パメラ』批判派として、『シャメラ』および『ジョウゼフ・アンドルーズ』を上梓し、人気を博していた。

『セメレー』も『ヨセフとその兄弟たち』も、この「パメラ論争」の流れの中に位置づけられるべき作品であり、そうすることで2作品をよりよく理解できる。

『セメレー』が身分違いの結婚の悲劇を描いた作品であるとする、『ヨセフとその兄弟たち』は、身分にふさわしい結婚を追求しながら、数々の苦難を克服し、幸せを獲得し

ていく作品であることが判明する。これもまた『パメラ』批判の作品なのである。

ヘンデルとフィールディングの関係を探っていくと、近年のヘンデル研究の成果にたどり着く。近年、ソールズベリーの貴族ジェイムズ・ハリスがヘンデルを自宅で接待したり、ロンドンのヘンデル作品演奏会に出かけていることが、彼の書簡によって分かってきた。

一方、ジェイムズ・ハリスはフィールディングとも親密な関係にあったことが知られている。こうしてハリスを通じたヘンデルとフィールディングとの関係が明らかにされたのも、本研究の成果の一つである。ヘンデルとフィールディングが直接に面会したかどうかまで調査することはできなかったが、二人が単なる同時代の有名人ただただけではなかったと言い得ることは、研究を行わなければならない。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

高際澄雄「バーレスクオペラ『ウォントリーの竜』の詩と音楽」『宇都宮大学国際学部研究論集』査読有り 37巻 pp.13-28, 2014年

高際澄雄「バーレスクオペラ『ウォントリーの竜』の元歌」宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』査読なし 63号 pp.27-43, 2014年

高際澄雄「ヘンデルと貴族歌劇団」『日本ジョンソン協会年報』査読有り 38巻 pp.19-23, 2014年

高際澄雄「ヘンデルと1730年代初頭の演劇界」『宇都宮大学国際学部研究論集』査読有り 39巻 pp.105-116, 2015年

高際澄雄「ヘンデル『オルランド』の独創性」『宇都宮大学国際学部研究論集』査読有り 40巻 pp.125-137, 2015年

高際澄雄「パメラ論争における『セメレー』と『ヨセフとその兄弟たち』」『宇都宮大学国際学部研究論集』査読有り 41巻 pp.111-123, 2016年

[学会発表](計1件)

高際澄雄「ヘンデルとフィールディング～英文学史の視点から考える」日本ヘンデル協会 2015年11月8日東京文化会館小会議室

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高際澄雄 (TAKAGIWA Sumio)  
宇都宮大学・国際学部・名誉教授  
研究者番号：50092705

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：